

2022年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

退く間に光を満たしゆく初日
七種の七色の香を囃しけり
早梅のただ一輪といふ光
節分の闇星屑を散りばめる
日めくりの一枚に春立ちにけり

八王子 石井 蓉子

月丸く残り朝冬至の日
枇杷の花白き朝日の中にあり
ケーキ食む一人ぼっちのクリスマス
山際に夕日の落ちて山眠る
言葉なく行き交う人の息白し

新宿区 壺守 景子

寝返って蒲団に隙間生まれけり
雨の打つ幹黒々として大冬木
足跡をつけたきものや霜柱
初霜や汚れる犬と遊びをり
瘤あれば越えるものよとスキーヤー

町田 小森 まさひこ

元日の富士を射りたる朝の日矢
東の空に生まれし初明り
独楽を打つ昔の技は出でてこぬ
盆梅の知る十年間の我が家
先生は九十歳や福寿草

2022年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

蘆の芽へ水の光の寄る中州
花種蒔く土へ希望を託しつつ
今朝掘り立ての筍はいらんかね
磯遊び蟹はすばやく岩と化す
老いたれど昔海の子磯遊

八王子 石井 蓉子

お日様の色そのものやクロッカス
梅の花黙っただまって咲にけり
草の花ひっそり咲けば山笑ふ
うきうきとバレンタインの少女たち
春近し風の匂ひも日の色も

新宿区 壺守 景子

見上げたる子供の口に牡丹雪
遠富士を置く冬空に鳥一羽
汀子句碑抱く御山に春兆す
筆休め一服時の?梅香
雑踏を抜けて花屋で春を買う

町田 小森 まさひこ

汀子邸の梅塀越ごしに香をこぼす
虚子記念分学館に伸びし梅
剪定の漢すくと枝に立つ
父母に兄も混じりて春の雲
アルプスの水に育ちし山山葵

2022年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
一瀑のしぶきを泳ぐ鯉幟
威を天へ大王松の若緑
巢立鳥柄長だんごといふはこれ
葉っぱに目あり雨蛙まばたける
鼻の差といふ勝馬の黒光り

八王子 石井 蓉子
つつじ咲く何も言はずにつつじ咲く
萌ゆ若葉に心豊かになりけり
桜散る何時もあたしは一人きり
鳥の声風の匂ひも夏隣
窓開けて五月の朝に聴くシヨパン

新宿区 壺守 景子
明日香路の紫雲英紫雲英を歩きけり
山の辺の道を沈めし黄砂かな
み吉野の花の移ろひ見る三日
登り来て奥千本の花に会ふ
宿坊の窓に広がる花霞

町田 小森 まさひこ
竹の皮脱ぐ旧道に暗さあり
枇杷熟れて高校野球予選かな
万緑や村に一つの信号機
海岸の女を包むやませかな
木苺を知らぬ子供に渡しけり

2022年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
ひねくれて親近感を増す胡瓜
籠り居や鉢の金魚の太り過ぎ
家居にも倦みて金魚に八つ当たり
冷やかに次の検査の予定また
銀漢の億光年といふ流れ

八王子 石井 蓉子
雨あがりの桜桃忌の空をみる
幼子の一步の先に夏来る
黒南風に窓を閉めつつ空を見る
紫陽花に頑張ってるねと言はれけり
ひまわりの国ですそれはウクライナ

新宿区 壺守 景子
十葉の匂ひに迫る犬の鼻
紫陽花の色を写してにはたづみ
潦((にわたずみ)に沈む花苔の墓前
万緑を纏ひ汀子句碑すく
高層の片陰長く長くあり

町田 小森 まさひこ
月見草開き初めたる時帰宅
一輛の灯り映している青田
夏霧を抜けて霧笛の鳴り止まず
蝦夷残暑日傾までのものであり
一つ咲き後は一気や花木槿

2022年9～10月掲載分

2022年11～12月掲載分